

平成三十年一月投句

遠山に朝日明け初め霜の里

手締めして解き初む初荷五六人

表向き裏向きに絵馬春を待つ

勝利

寒晴や朽ち葉啄む鳥水漬き

真理子

原チャリが凍町を切り裂いて行く

紫陽花の黄葉のはずれ落ち冬芽

本殿の裏より雪の落ちる音

青空の檜皮葺よりしずる雪

杉の葉はすでに集まりどんど焼

節子

昼の湯のほどよき疲れ小正月

由紀子

祝い歌初荷の車送り出す

猿曳きの袖咬む猿の細き脚

母許の雪の深きを案じつつ

初句会後は湯治の客となり

光子

夜は雨になるらし梅の咲きさうな